

高昌における儒教の在り方とその役割りについて

——吐魯番出土古籍『孝経』を中心に——

濱 野 静 美

目 次

はじめに

第一章 吐魯番出土文献の出土状況と内容の整理

第一節 葬礼文書

第二節 埋納文書

第三節 二次利用廃紙

第二章 国家が行った儒教教育について

——儒教の在り方とその時代的背景——

第一節 北魏における儒教教育について

第二節 魏氏高昌国における儒教教育について

第三章 随葬された『孝経』——儒教がもたらした思想的体系——

第一節 六朝時代における『孝経』の随葬について

第二節 随葬された『孝経』が示す儒教の宗教性について

おわりに

要 旨

吐魯番出土の文字資料は、吐魯番地域に位置する阿斯塔那・哈拉和卓古墓群と呼ばれる古墓群と高昌古城、交河古城と呼ばれる古城

址などを対象とした発掘調査によって将来されたものである。この地では十九世紀末から発掘調査がおこなわれていたが、二十世紀に入ってから第三次大谷探検隊（一九二二年）、第三次スタイン隊（一九一五年）によって発掘調査がおこなわれ、またスウェーデン・中国・ドイツなどが合同で派遣した西北科学考察団（一九三〇年）やドイツ隊のル・コック（一九〇四―一九一四年）、グリウンウェーデル（一九〇二―一九〇七年）によって多くの文物が入手され将来された。また近年では、新疆博物館文物考古隊による発掘調査（一九五九年―一九七五年）によって、一七〇〇点以上の文字資料が将来され、整理・研究が行われている。阿斯塔那・哈拉和卓古墓群においては、未だ発掘されていない墳墓が数多く存在し、一九七五年以降にも継続して発掘調査が行われ、一〇〇点に及ぶ文字資料が将来されている。これら多くの文字資料は、中国及び中央アジアの歴史、言語、文字、思想などの諸研究において第一級資料として扱われているものである。

阿斯塔那・哈拉和卓古墓群は高昌古城の北方に東西五km、南北一km余りに亘って広がり、その年代は出土している有紀年文字資料により三世紀から八世紀に及ぶとされている。そしてそれぞれの墳墓の年代確定によって次のような編年が提示されている。

一期：中原王朝の西晋によって高昌に戊己校尉が置かれた時期から、五胡十六国時代に河西を支配した前涼をはじめとする地方政権によって高昌郡が置かれた時期を経て、且渠氏から馬氏に

至る初期高昌国時代にあたる三世紀から六世紀初頭。

二期：中原における南北朝後期から隋を経て唐に至る時期、即ち魏氏高昌国時代にあたる六世紀初頭から七世紀中頃。

三期：魏氏高昌国が中原王朝の唐に滅ぼされ、高昌に西州が置かれた時期、即ち西州時代にあたる七世紀中頃から八世紀末。

本論においてもこの編年に従って阿斯塔那・哈拉和卓古墓群より出土した漢文文字資料を中心にとりあげることとなる。その中には『尚書』『毛詩』『礼記』『春秋左傳』『孝経』『論語』『爾雅』などの儒教經典及び儒教に關係する文字資料（以下儒教關係文書と称す）が散見される。今日将来されている吐魯番出土文献は、次のように大きく三つに分類される。

・葬礼文書

被葬者と共に埋納する目的で新たに作成されたもので、随葬衣物疏・功德疏・買地券などがこれに相当する。

・埋納文書

被葬者の生前中に作成されたもの、或いは死後にその写しを作成して埋納されたもので、告身・契約文書・官文書・古籍などがこれに相当する。

・二次利用廃紙

一度廃棄されたものが鞋や帽子などに二次利用されたもので、古籍や官庁文書を含む様々な内容の文書が認められる。

これらのうち、儒教經典は先行研究において埋納文書や二次利用

高昌における儒教の在り方とその役割りについて

廃紙にみられる「古籍」と分類されるものを含まれており、儒教關係文書は主に二次利用廃紙に散見される。また葬礼文書に含まれる随葬衣物疏には、その付加文言の部分に、儒教における最高神格である「昊天」の名がみられ、副葬品リスト中に「孝経一卷」と記すものが数点みられる。また実際に、「孝経一卷」という記載のある随葬衣物疏が出土している墳墓から、埋納されたと思われる古写本『孝経』が出土している。

これらの文字資料はいずれも埋葬品であり、今日まで、王国維、羅振玉、黄文弼、内藤湖南各氏をはじめ、池田温、嶋崎昌、小田義久、白須浄真、荒川正晴、呉震、侯燦、王素各氏など多くの研究者によって、阿斯塔那・哈拉和卓古墓群の編年や墓制、被葬者層を検討するものをはじめとし、随葬衣物疏の編年や書式を検討し、当時の葬送儀礼や冥界観について考察するもの、また土地制度や官制の在り方を考察するものなど、多くの視点から研究がなされている。これらの先行研究において、埋納された古籍などの文字資料は当時の人々の冥界観と関わりがあるとされているが、その詳細を捉えることは困難であるとされており、さらに儒教經典及び儒教關係文書を探り上げて吐魯番地域と儒教の關係について具体的に論じたものはほとんど見受けられない。

そこで、出土している古籍などの文字資料の中から、敢えて儒教經典と儒教關係文書を探り上げ、正史などの史料中に見られる事実と共に整理・検討し、その中で特に『孝経』が果たした役割りにつ

いて注目し、六世紀から七世紀の吐魯番地域、特に麴氏高昌国（五〇一年～六四〇年）における儒教の在り方と儒教がもたらした影響について、出来る限り明らかにしようというのが本論の目的である。

第一章では、理解の前提として、今日将来されている麴氏高昌国時代の儒教經典及び儒教關係文書を列挙し、その出土状況と内容についてまとめ、更にそれらが出土した墳墓と被葬者について考察した。第二章では、麴氏高昌国が官制をはじめとする様々な政策において模範としていた北魏における儒教教育を、正史中にみられる記載から概観し、『孝経』は儒教教育において、儒教經典の中でも特に重用されていたということを述べた。そして『孝経』が説く『孝』の在り方をみた上で、北魏の儒教教育において『孝経』が重用された要因と『孝経』が果たした役割について考察した。次にその影響を受けた麴氏高昌国の儒教教育について、その在り方を正史にみられる記載を検討した上で、将来されている出土資料と共に考察し、更に麴氏高昌国における胡語の在り方について若干の私考を述べた。そして麴氏高昌国においてどのような儒教經典が受容されたのかについて、同じく正史にみられる記載と出土している資料から考察し、いわゆる十三経が麴氏高昌国においても通行していたという可能性を述べた。第三章では、麴氏高昌国において、『孝経』が思想的にどのような役割りを果たしていたのかを考察する上で、まず前提として六朝時代において、本来は非宗教的な儒教經典の一つであった『孝経』の宗教的な在り方を、六朝時代の思想的体系で

ある「三教兼習」を背景として正史列伝にみられる記載を挙げて述べた。そして麴氏高昌国において、「三教兼習」による影響の下に形成された冥界観の在り方を考察し、副葬品として随葬された『孝経』がもつ宗教的意味とその役割りについて述べた。

儒教はその道德倫理的な礼教性ゆえに、宗教としてよりもむしろ学問として扱われてきたものである。よって古代より、『論語』『孝経』をはじめとする儒教經典は子弟教育の教材として扱われ、学館において教授された当時の人々の教養の基礎を成していたものである。六朝時代において、儒佛道の「三教兼習」という思想的体系が形成され、そして本来は非宗教的な儒教經典の一つであった『孝経』は、邪を祓う呪術的な力を付加されて被葬者と共に随葬されるようになった。阿斯塔那古墓群から埋納文書として出土した『孝経』は、麴氏高昌国において儒教が礼教的な学問としてだけではなく、信仰対象となり得る宗教的なものとして、「三教兼習」という思想的体系の影響の下に受容されていたということを物語っていることは明らかであると考ええる。